木山捷平全集

第六巻

講談社

木山捷平全集 第六巻

昭和五十四年四月十五日 第一刷発行
定価 三八〇〇円

著者 木山捷平
発行者 野間省一
発行所 株式会社 講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
電話東京03九四五―一一一一(大代表)
振替東京八―三九三〇郵便番号一一二

編集 株式会社第一出版センター
印刷 豊国印刷株式会社
製本 島田製本株式会社

© 木山みのを 昭和五十四年
Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替え致します。

0393-423463-2253 (0)

木山捷平全集　第六巻　目次

〈小説〉

奈女沢温泉　一
献盃　二七
遅刻結婚　三五
無門庵　四九
太宰治　六五
弁当　八九
清流　九九
井伏鱒二　一一
七月の情熱　一二六
朱い実　一四〇
六日目　一五一
還暦の旅　一六三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

山陰　一七七
美神　二〇〇
箸と杖　二一三
月桂樹　二二五
洋行がわり　二四〇
弥次郎兵衛　二五二

〈随筆〉

I

野猿の見学　二七五
ゴヘイダという言葉　二七七
娘と私の感覚のあいだ　二七八
伊良湖岬　二八〇
六四会のこと　二八五

海あれこれ　二八七
本とつきあう法　二八八
私の小説作法　二九二
椎の若葉　二九三
元陸軍二等兵の告発　二九五
心にのこる話　三〇一
私の古典　三〇三
土一升金一升　三〇四
つけ目　三〇五
もっとも派　三〇七
実感的スポーツ人生　三〇九

Ⅱ

ウグイスとツバキ　三一〇
柚子の木　三一二
虫の自殺　三一三
コオロギとセミ　三一四

若気のあやまち　三一六
歳末雑感　三一八
わが家の歴史　三一九
質屋がよい　三二〇
競争心　三二二
季節の味　三二五
ままごと　三二六

日記　昭和三十九年～四十年　三二九

あとがき　木山みさを　三七九

題字　蓬　萊　利　兼
装幀　アトリエ・セブン

木山捷平全集　第六巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

小

説

奈女沢温泉

一

年が明けたから去年になるが、去年の十二月中旬のある日、東京Z大学の哲学科教授朝倉荘之助は、午後三時七分上野発直江津行「妙高」に乗った。本当は午前十一時五分発長岡行の列車に乗る方が万事好都合であったが、家を出ようとした時郷里関係の学生二人がやって来て、思わぬ時間をつぶされ、予定よりも出発がおくれた。

「これからいらっしゃるんじゃ、向うへ着いたら夜にならないかしら。明日になさったらどう？」

長年つれそった細君が忠告したが、

「いや、思いたった日が吉日だ。着物を出してくれ」

と朝倉は言った。

「着物よりも洋服の方が便利じゃありません？　汽車の乗り降りはむろんのこと、山道を歩いたりなさる時」

「便、不便は言って居れない。洋服を着てたんじゃ、俳句は作れないよ」

と朝倉は言った。

朝倉はこの一、二年来俳句にこりだしていた。雑誌にも加入せず、発表の場所もなく、ひとり作って愉しむという方だった。二十何年間味も素っ気もない哲学を講じて来た反動かも知れなかった。二つ年上の細君が五十の坂を越えて、がたッとお婆さんになった反動かも知れなかった。

列車は関東平野を横切って、北へ北へと進んだ。急行だから食堂がついているだろうと思っていたが、食堂はついていなかった。そのかわり物売り娘が物を売りに来た。

「ビールはあるかね」

「ございます」

朝倉は鑵入りビールと落花生を買って、

「君たち、上野から乗ったの」

ときくと、

「いいえ、大宮からです」

二人の少女の中の一人が活発に返事をした。

「大宮からねえ。それじゃ、君たちの家は、大宮にあるの」

ときくと、

「いいえ家は長野です」
ともう一人の少女の方が活発に言った。
朝倉のぼんやりした想像は当らなかったが、こんな場合、当らない方が却って面白かった。実際のところ、上野から汽車に乗った男が、上野から乗り込んだ物売りのモノを買って食べるなんて、興も趣もありゃしない。自分が二十何年間メシの種にしてきた古びた哲学ノートのようなものである。どういう風な仕組みになっているのかは知らないが、長野に家がある少女が、関東平野を北に向って走っている汽車の中でモノを売っている所に、何とも言えない情趣があった。
朝倉はビールの罐に二つ、穴をあけた。一つは空気抜けで、一つは口をあてる穴だった。口をあてて、チュウチュウやっていると旅行気分が出た。
車窓にうつるのっぺら坊の景色を見物しているうち、列車は高崎駅に着いた。車掌に言われた通り、同じホームで待っていると、十分も待たないうち、水上行きの奥利根号がはいって来た。
奥利根号は妙高号よりも、もっとすいていた。
「ここ、あいていますね」
四人分の座席に一人で坐っている若い娘の前に行って朝倉が声をかけると、
「ええ、どうぞ」
娘が言った。茶色のオーバーは窓の釘にかけ、荷物は網棚にあげ、誰かひとが来るのを待っているかのような風情だった。
「失礼だが君はどこまで？」
朝倉はきいた。
「水上までです」
娘が言った。
「水上へは行くの？　それとも帰るの？」
「行くんです。小父さんはどこまで？」
娘がきいた。
「ぼくは上牧まで」
朝倉は言った。
それからさっき高崎駅のホームで買った夕刊をひろげた。ひろげるのはひろげたが、活字は目にはいらなかった。ななめ前の窓際に腰かけて何か曰くありげな娘の態度をそれとなく気にかけた。
そうしている所へ車掌が検札にきた。高崎から乗り替えた客から準急の料金を取ろうというのが主目的のようであった。朝倉は車掌に百円わたした。
そしてたいして意味もなく準急券を手に持って眺めていると、

「小父さんは上野から乗ったんですか」
と娘が声をかけた。
「ああ、上野から乗ったんだが、前の汽車に乗りおくれてね。……君はどこから乗ったの？」
「わたしは新宿」
「新宿から？　それから、どこで乗り替えたの？」
「乗り替えなんかありませんよ。この列車は新宿からの直行なんですもの」
「へへえ。それはちっとも知らなかった。そんな列車があったのかなあ」
「ありますよ。小父さんは時刻表をもっていません？」
「時刻表は持っているが」
「だったらちょっと出してごらんなさいよ」
朝倉がカバンの中から時刻表を取り出して娘にわたすと、娘は靴をぬいだ細い足を前の座席に投げ出し、時刻表をスカートの上に置いた。そして指にツバをつけつけ、頁をめくるのに相当長い時間がかかったが、
「ほら、これですよ」
とある一頁を朝倉の前に差し出した。
「ほ、ほう、なるほど。新宿駅午後二時二十五分発八高線経由か。しかしこんな変な八高線の所に出ているんじゃ、ぼくが分らなかったのも無理はないなあ。君はいったいどうしてこんな列車を知っていたの」
「新宿駅に電話をかけてきいたんです」
「ふん、なるほど。そういう手もあるんだなあ。それで家はどこ？」
「電話をかけたのは世田谷です」
「ぼくは吉祥寺なんだが、知っていれば初めからこれに乗るんだったなあ」
「吉祥寺にはとまりませんでしたけれど、立川と八王子には停車するんです」
「だから立川か八王子に行って待っていればよかったんだ。残念なことをしたなあ」
「そうすると準急券を二重に買わなくてもすんだんですよ。小父さんは易者さんなんですか」
「うん……まあね」
朝倉は言葉をにごして便所に立った。便所から出て洗面所に入って自分の姿を鏡にうつしてみた。和服の上に着ているトンビまがいのコートはともかくとして、頭にのっけている宗匠頭巾は易者とみなされても文句は言えないような恰好だった。
ひとりで苦笑して通路に出た時、便所のわきに物売りの溜りがあるのを見つけた。
「ビール、あるかい？」

籠の上にうつぶせになっている少女にきくと、
「あります」
少女がびっくりしたように顔をあげた。
朝倉はビール一鑵とコカコーラの瓶を買って元の座席に戻り、
「ハイ、当るも八卦当らぬも八卦、コカコーラを一本、君に進呈しよう」
と娘に差し出すと、
「あら、……どうもすみません」
娘は前の席にのばして上げている足をひっこめて受取った。
朝倉はまたチュウチュウ、ビールを口のみしながら、こんどは娘を真ん前の位置から観察した。頭にはパーマはかけていなかった。顔にも化粧はほどこしていなかった。それにしては色は白い方だが、娘がどういう職業に属する女か、ちょっと見当がつきかねた。
「失礼だけど、君はB・G？　それとも大学生？」
朝倉はきいてみた。
「残念ながら、その二つのうち、どっちでもありません。小父さんはやっぱり、易者ではないのね」
娘がコカコーラのストローを口にくわえたまま、上眼づかいに言った。
「はてな、それでは何だろう。世の中には分らないことは無数にあるから、別に気にやむほどのこともないけれど……」
朝倉は眼を窓の外にうつした。
窓の外はいつの間にか日がとっぷり暮れていた。一年中で一番日の短い季節だから仕方のないことであったが、日がくれてから目的地に着く気持が何となく朝倉の心を心細くした。
乗客たちも心なしか、皆んなしょんぼりしているようであった。列車の天井についている電灯も、心なしか暗いようであった。
長旅に疲れたというほどでもあるまいが、娘は居眠りをはじめた。一たん引っ込めていた足をまた前の座席にあげ、列車が動揺するたびに靴下の足先が朝倉の体にさわった。

二

上牧駅におりた客は朝倉を入れて三人だった。ホームは高い場所にあるらしく、急なコンクリートの段々をおりて、改札口で駅員にキップをわたし、
「奈女沢温泉へ行こうと思うんだが、バスはまだありましょうか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com